

---

# ドアを開けると雪国だっ、た？……はあ？！

篠宮 楓

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドアを開けると雪国だつ、た？……はあ？！

### 【Nコード】

N1240BA

### 【作者名】

篠宮 楓

### 【あらすじ】

「吾輩は犬である、名前はもうある」の、続編。気が付いたら、真っ白な場所にいたシバ。呆然とするシバの叫び声に応えたのは、飼い主ねーさんの想い人、にーちゃんの飼い犬「桜」の声だった。シバ、口悪いです。下ネタまでいかないけど、口悪いんです、ご用心><

ドアを開けると雪国だった……って……

『はああああ?!』

気持ちのいい眠りから覚めた俺の目の前は、なぜか真っ白だった。

やべえ、オレ、ちょっとあの世とか来ちゃってんじゃないね？

だってアンタ、目の前真っ白だぜ？

うわ、マジかよ……

思わず、ぱっかりと口を開けた。

吹き込んでくる風が冷たい。

え、ちょっと待って。

オレ、昨日どうしてたっけ？

寝る前、何してたっけ？

両前足で頭を抱えて、地面にへたり込んだ。

確か昨日は、またねーさんののろけなのか相談なのかわかんねー話に夜中まで付き合わされて。

ほんでもってから、やっとありついたメシは五日連続おんなじ味でさー  
ったく、桜んここで食わせてもらったジャーキーの味が忘れらんねー  
ーってのによー  
でからに、抗議の意味で吠えたらちよー怒られて、ふてくされて寝たような???

『つーか、最後に食った飯があれかよ！　せめてジャーキーよこせえええつー!!』

『煩い、バカシバ!』

お互いワオーンとしか言っていないけど、片や嘆き、片や叱り。  
犬の言葉なんざ、人間にゃー、わんとかあんとかわおんとかわふんとか……

『って、何私の事無視してるのよ。シバの癖に生意気な』

「ホント、桜ちゃんって可愛くて大人しいわね。うちのシバとは大違い」

桜とうちのねーさんの声が重なって、オレのハートは粉々さ  
どっちにしても、オレア貶される側かよ！　ケッ!

『へっ』

そこでやっとな気が付いて、がばつと顔を上げる。

そこには……

『ねーさんや!』

真横にねーさんが立っていた!

喜び勇んで、体全体で感情をあらわにする。つつーか、後ろ足で立ち上がって思いっきりその足に縋り付いた。

『オレ、死んだわけじゃなかったんだああっ! よかった! ねーさんが天国にいるわけ……ぐはあっ』

とたん、腹を思いっきり圧迫されて、うえええと(あくまでワオオオオン)呻き声を上げる。

「何やってるの、シバ」

少し困ったようなそれでも笑みを含んだ声に顔を上げれば、

『……』

目が全く笑っていないかった。

「あんた、こんなところで何さかってんのよ。馬鹿じゃないの、ていつかむしる馬鹿なんだから、せめて馬鹿さらさないでよ」「

耳元で囁かれた言葉を、オレは一生忘れない。

それが本音か、マイ飼い主……

『エロシバ、何でもいいけどそこで伏せない方がいいと私思うけど？』

……呼び名が変わったぞ、コラ。

『うるせえなあ。今、オレは飼い主の本音を知って傷心なんだから、そっとしておいてくんない？』

『あ、そう？ そんなの今更な気がするけど。まあ、お腹が凍傷にでもなっつていいなら、そのままいれば？ 私はごめんよ』

……は？ 凍傷？

そういえば、すっげー寒いとか思って……

自分の真下の地面を見る。

『真っ白』

そのまま顔を上げて、あたりを見回す。

『真っ白？』

ぐるりと体ごと回って、風景を確認する。

なんか長い板を持った奴とか、アイスのスプーンみたいな形したでかい板持った奴とか（夏に目の前で食われて、貰えない悲劇）、て言うか皆一応に厚着とか。

『「どこ何処おおおっ!?!」』

「うるさい、シバー!」

叫んだら、今度こそねーさんに怒鳴られた。

……やっぱ、ぬくぬくがいいよな。

『あんな……、ホント馬鹿ねえ』

……雪降ったら犬は外で駆け回るとか思ってる奴!

そりゃ駆け回るけど、限度があるっちゅーねん。

あと、慣れもあるっちゅーねん。

オレの住む町は、冬でもあんまり雪の降らない場所だからな。

突然こんなところに連れてこられりゃ、喜んで駆け回る前にびっくりして心臓凍るわ!

ペットを預かってくれるという、飼い主にしてみりゃラッキーな、ペットにしてみてもラッキーな場所でぬくぬくと毛布の上に寝そべるオレ。

『普通気付かない? 寝てるからって、ゲージに入れられれば』

隣で桜も毛布に寝そべりながら、呆れた顔してわふつとあくびをし

た。

ていうか、いつ会ってもお前が眠そうなのそのワケをオレは知りたいよ。

『気付かねーよ、全く。昨日だって、夜中までねーさんの独り言に付き合わされたんだからよー』

おかしいと思ったんだよ、特になんにもない日なのになんで夜眠れないとか言ってるのかってさ。

眠くてほとんど聞き流してたけど、思い出せば言ってたよ。すきーとかすのぼーとか、雪とか二人きりとか。

『でも、オレには関係ないって思ってただけど。普通、連れてくるか？ デートに飼い犬』

『にーちゃんねーさんなら、やるわね。現に私達ってば、ここにいろし』

まったくだ。ふいつと外に目をやれば、恥ずかしそうに「すのぼー」とやらをやるねーさんと、教えてるんだか体触って照れてるだけなんだかのにーちゃんの姿。

『つつかあんだだけ厚着してんだから、触ったって掴んだって握ったって、感触もなけりゃー触られてる方も何にも感じねーだろーよ。何、恥ずかしがってたんだあ？ なあ？』

わふわふと桜に顔を向けると、つぶらな瞳を（前も言ったけどオレも同じ瞳）これでもかと細めて、オレに向けた。

『いつとくけど、柴犬界全体がアンタと同じ思考じゃないからね。単純エロシバ』

おい、オレ様を飾る単語が増えたぞ。まったく嬉しくない感じの。

『まだ二人とも、恋人未満なのよ。でも友達以上でもあるから、必

要以上に反応しちゃうだけ』

わふ、と、気怠げにため息をついた桜をぼかんと口を開けて見つめた。

『お前何者？ ホントに犬？ 人間じゃなくて？』

オレの言葉に桜は一瞬目を見開くと（頑張ってもちっちゃい目だけどな！）、ふふ、と笑った。

『シバ、アンタ生まれ変わりって信じる？』

『へ？』

生まれ変わりいい？

胡散臭そうな顔になっているのだろう。

桜は、ふつと笑った（感じ）。

『もともと、人間でOLやってたのよ。とある会社の総務でね』

『は？』

おーえる？

そーむ？

『あの、隣の課のしゅにんとかに虐められる同僚がいるような？』

『何、その具体的事例』

あ、いや。

最近、新聞で読んだ気がする話だったもんで。

しかも、そこに「桜」ってでてたもんで。

『人としての人生全うしたら犬とか、ありえないわよねえ』

え、何その犬生悟っちゃったみたいなの、気怠い感じ！

マジで！？

お前、人間の記憶持ってるのかなんとか……

信じられない目を向ければ、くすりと笑う。

『もう一度、人として生まれたかったわ。愛していた人がいたんですもの……』

『桜……』

それって、護とか溝口とか名前付かないよね……？（拙作、きつと、それは参照）

桜は微かに口角を上げて（牙見えちゃうけどそこはスルーで）、毛布に顔を伏せた。

『せめて、夢で逢いたいから。早く飼い主たちがくっついてくれると、睡眠妨害されずにあの人に会えるのに……』

『……！』

ずきゅーんっ

その姿が、凄く寂しそうで。  
生意気な言葉を吐く桜だけど、凄く悲しそうで。  
オレのハートを撃ち抜いた。

『桜！』

思わず、ワオンッと叫ぶ。

『……』

桜は伏せたまま片眼を微かに上げて、オレをそのつぶらな瞳に映した。

『オレがいるじゃんか！ そんな顔（しつこいけど、おんなじ顔）すんなよ！！ 溝口なんか忘れちゃえ！！』

『は？ 溝口？』

『いいじゃねーか、昔の事なんてっ！ オレがいるだろ？ オレじやダメか？』

桜は伏せていた顔を上げて、オレを見つめた。

『オレにしとけよ、桜！ だから……』

ここぞとばかりに、決め台詞を脳内反芻。  
口を大きく開けて、桜を見据えて叫んだ。

『だから、ヤラせる！！』

『逝ってよし！！』

ぽんっ

……桜に、外に蹴りだされた。

『あれ?』

「何やってるの、シバ!？」

きよとんと雪の上に座り込んだ俺に気が付いて、ねーさんが駆け寄ってくる。

オレは一体何が起きたのか分からなくて、桜とねーさんを交互に見つめた。

桜はオレを蹴りだしたドアから顔を覗かせると、「バカシバ」と呟いてそのまま毛布へと戻って行ってしまふ。

「ちょっと、ホント馬鹿なんだから! 大人しくしてられないの?」  
ねーさんが焦ったようにオレをもう一度引っ張っていこうとしたけれど、やっと魂が頭に戻ってきたオレはそれに抵抗した。  
傍で見ていたにーちゃんが、困ったようにオレの傍に立つのが見える。

『.....』

そんな二人をオレは見上げて。

思いつきり。

「うわっ!」

「きゃあっ!」

にーちゃんに、体当たりを食らわせた。

突然の行動ににーちゃんは対処できず、目の前のねーさんに抱きつくように雪の上に転がる。

一瞬の間の後、雪の上、抱き合って転がっている飼い主二人がいた。

『さっさとくっつきやがれ、両想い野郎め』

ニヒル（気分）な笑みを浮かべ、オレ様は桜のいるペット預り所へと戻った。

こっそりとドアから中に入ると、桜はさっきと同じ場所で隣の犬と喋っていた。

『アナタ、本当に元人間なの?』

隣の、見知らぬお仲間が桜に声を掛ける。

そんな直球で傷を抉ってくれるなよ、見知らぬおばちゃん（おばちゃん犬？）や。

桜が可愛そうになって話に割り込むべく歩き出すと、

『そんなわけないですよ』

にっこりと笑み付きの桜の声が聞こえた。

『え、でもアナタ今そう言って……』

『だってもう、飼い主に振り回されるのうんざりだし、早くくつ  
ついちゃえば私ゆっくり眠れるし。私深夜の韓流犬ドラマ毎週楽  
しみにしてるんですよ』

……は？ 韓流犬？ って、ナニ？

『単純シバなら、ああ言えば飼い主達をどうにかしてくれるかな  
って思つて。前も、アホみたいな事で意外とうまくいったし！』

……へ？

『読犬新聞の連載小説の登場人物設定、そのまんま言っただけなの  
に信じちゃうし！ 上手くいったわ。最後の一言がすごく余計だ  
ったけど！』

『あら、魔性の女ね！』

『だってシバと仲が良いとか噂されて、大好きだった犬カレに振られち  
やっただんですよ！？ これくらいいいと思いませんか？』

『まあ、それは仕方ないわねえ』

やだあ、あはは……

けらけらと、楽しそうだね、笑い声。(はからずも5・7・5)

……

『じゃねえぞー！らあっ！』

二人で笑い合っているところに乱入していけば、胡乱気に眉間にしわを寄せた桜と目があった。

『何か？』

びくり、と、体が震える。

『……何でもいじりません』

……この世界も、男は黙って我慢が一番。さ

はははん……



(後書き)

新年、明けましたね^^

昨年は本当に色々ありました

今年が皆様にとって 良い一年となりますよう

お祈り申し上げます

皆様 本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

頑張ります！

まだ更新再開はできないのですが、時間ができたので短編投下。

新年一発目がシバとか、それでいいのか篠宮楓(笑

きつと、図書室の更新は来週再開いたします。

よろしく願いたします^^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1240ba/>

---

ドアを開けると雪国だっ、た？.....はあ？！

2012年1月3日00時55分発行